

『蜻蛉日記』における 「塵のみ積もるさむしろ」考 — 時間の経過を表す比喩的表現 —

李美淑*

目次

- はじめに
 - 一 時間の経過を表す比喩的表現の様相
 - 二 「塵」の比喩
 - おわりに
-

はじめに

『蜻蛉日記』¹⁾において天祿二年(九七一年)は、作品全体の流れの中で、大變重要な意味を持っている年である。というのは、『蜻蛉日記』は道綱母の「ものはかない身の上」、すなわち兼家との二十一年間にわたる結婚生活の経緯を語った作品であるが、その天祿二年を境にして道綱母の對兼家觀の變化、または道綱母の人生觀の變化が読み取られるからである。²⁾道綱母の意識の變化をもたらした天祿二年の出來事としては、兼家の度重なる「前渡り」に衝撃を受け、「前渡りせさせたまはぬ世界」を求めて行った道綱母の「鳴瀧籠り」が多く指摘されている。

次の引用は、道綱母の憂愁が段々高まっていく、その天祿二年二月の記事である。

* 梨花女子大學校 講師、日本中古文學

- 1) 本文の引用は、木村正中・伊牟田經久校注・譯、『土佐日記蜻蛉日記』(日本古典文學全集九、小學館、一九七六年五月)による。以下、「全集」と表記する。
- 2) 天祿二年が道綱母の人生觀や對兼家觀において大きな境目になっているということは、拙稿『蜻蛉日記』の構造と意識—『つれなし』『なほあらじ』を指標として—(『日本文藝論叢』第十三・十四合併號、二〇〇〇年三月)において、作品中の「つねなし」「なほあらじ」という表現の用いられ方の變化を根據にし、考察したことがある。

二月も十餘日になりぬ。聞くところに三夜なむ通へると、ちぐさに人はいふ。つれづれとあるほどに、彼岸に入りぬれば、なほあるよりは精進せむとて、上筵、ただの筵の清きに敷きかへさすれば、塵拂ひなどするを見るにも、かやうのことは思ひかけざりしものを、など思へば、いみじうて、

うち拂ふ塵のみ積もるさむしろも嘆く數にはしかじとぞ思ふ(中巻・二五一～二五二頁)

ここで、道綱母は、兼家と近江という新しい女との関係が深まり、自分自身の所には兼家の足が遠のいてしまった状況を、さむしろに積もった塵を用いて表現している。「夫不在の妻の寢室の枕や床に積もる『塵』は、逢瀬の途絶えた日数の象徴で、王朝的閨怨の代表的な素材³⁾として歌に用いられてきたのである。しかし、夫の夜離れを表す表現として用いられている「塵」という歌ことばは、一方で「待つ女」⁴⁾である道綱母が「塵が積もる」ほど兼家を「待つ時間」⁵⁾、言い換えれば兼家の不在の時間を表す比喩的表現として取ることもできると思われる。

石原昭平氏の指摘のように、「日記文學は、時間をいかに體驗し、回想のうちに、作者がそれをいかに所有するか、という個有の内的體驗の文學」⁶⁾である。したがって、「日記文學の時間の特質は、(中略)作者自らが身を以て生きた時間」⁷⁾であり、「この日記の中を流れている時間は、昔から今へ、過去から現在へと流れてゆく、單なる客観的な時間だけではなく、作者の心情を包含した、發展性、繼續性をもつ時間」⁸⁾でもある。つまり、『蜻蛉日記』の時間もまた、年代記的な「外的時間」だけでは説明しきれない、「内的時間」⁹⁾も含んでいるのである。

そこで本稿では、道綱母が「自らが身を以て生きた時間」をどのように作品に形象化していくのか、特にその時間の経過をどのように表現しているのかについて考察してみようと思う。

第一に、『蜻蛉日記』に表れた時間の経過を表す比喩的表現の様相を、道綱母を軸として三つに分けて検討し、その比喩的表現の特徴と意味を考えてみる。

第二に、それらの時間の経過を表す比喩的表現のうち、「塵」という表現を取り上げ、

3) 片野達郎他編著『歌ことばの辞典』(新潮社、一九九七年十月)九十六頁。

4) 「待つ女」に関しては、村井康彦の「待つ女」(『國文學』一九七八年三月號、學燈社)に詳しい。

5) 近藤一一は、「蜻蛉日記の日付表現」(『一冊の講座蜻蛉日記』、有精堂、一九八一年四月、二一九頁)において、『蜻蛉日記』の時間を「待つ時間」と定義している。

6) 石原昭平「日記文學における時間―回想・他者・語り―」(『女流日記文學とは何か』、女流日記文學講座第一巻、勉誠社、一九九一年九月)一二七頁。

7) 近藤一一、前掲論文、二一六頁。

8) 柳瀬あや子「『蜻蛉日記』についての一考察―上巻に於ける時間経過のとらえ方―」(『神戸文化短期大學研究紀要』第十九號、一九九五年三月)三頁。

9) 秋山虔は「外的時間と内的時間」(『國文學』一九七〇年五月號、學燈社)において、「年代記的な時間」を外的時間、「わが歩みの歴史への回顧」を内的時間と説明している。

『蜻蛉日記』に先行する和歌に表れた「塵」の比喩的意味を考察し、その従来のイメージが『蜻蛉日記』にいたってどのような意味の変容を見せているのかを考察する。

一 時間の経過を表す比喩的表現の様相

比喩表現の機能とその研究の意義について、山口仲美氏は次のように述べている。

比喩表現は、その表現効果の面を眺めてみれば、成立契機が知性的であるにせよ、感性的であるにせよ、いずれも比喩を使わない敘述以上に事物や現象を具象化し、より強く相手の感情に訴える事にあつたのである。即ち、抽象的観念的な理論や、或はみた事のない事物に對して、比喩は我々の情感に訴えかけ、具體的な、我々の直接感知し得る物とし、我々に理解させるのである。また、ある場合には、とりわけ文學作品などに於いては、理解させるのみではなく、美的感覺を起させるのである。(中略)比喩は、勿論、たとえられるものととえるものとの關係に於て成り立つ。一般に、たとえられるものを本義と言ひ、たとえるものを喩義と言う。(中略)喩義に用いられる素材の質の分析を通して、表現主體の發想の性格とその限界を知り得るといふことなのである。(中略)喩義に用いられた素材は、單に表現された結果としての文章敘述の特徴を示すだけではないのである。表現主體の發想と密着し、喩義の素材を分析する事はとりも直さず、表現主體の發想の分析に他ならないのである。¹⁰⁾

従うべき論であると思う。

では、『蜻蛉日記』における時間の経過を表す比喩的表現¹¹⁾について考察してみる。語り手(表現主體)である道綱母を中心に置いて、時間の経過を表す比喩的表現を分析してみると、三つに分けることができる。(一)道綱母の待つ時間(兼家の不在の時間)、(二)道綱母の過ぎにし時間(兼家との結婚生活の時間)、(三)道綱母の不在の時間がそれである。以下、時間の経過を表す三つの表現を具體的に考察してみる。

10) 橋本(山口)仲美「比喩の表現論的性格と『文體論』への應用(1)(2)」(『國文學』一九六九年八・九月號、學燈社) (1)の二一三頁、(2)の二〇四・二〇五頁。

11) 本稿で使っている「比喩的表現」とは、「喩」と相通じる概念である。「喩」とは、喩えられるものと喩えるものの關係を直喩・隱喩・換喩などに形態から分節化する「比喩」と異なり、「比喩」の完成された形姿をとらない表現でも、比喩的な關係性を認めうるものまで含んだ廣義の概念である。一河添房江『源氏物語の喩と王權』(有精堂、一九九二年十一月)七頁參照。

(一) 道綱母の待つ時間

「道綱母の待つ時間」とは、言い換えれば「兼家の不在の時間」でもある。その時間の経過を表す比喩的表現は本文に四カ所見られる。

- (1) 思ふまに 山と積もれる しきたへの 枕の塵も 獨り寝の 數にし取らば つきぬべし
(上巻・一五二頁)
- (2) 例ならぬほどになりぬれば、あなものぐるほし、たはふれごととこそわれは思ひしか、はかなき仲なれば、かくてやむやうもありなむかし、と思へば、心細うてながむるほどに、出でし日使ひし甘坏の水は、さながらありけり。上に塵^{ちり}ゐてあり。かくまでと、あさましう、
絶えぬるか影だにあらば問ふべきをかたみの水は水草^{すいそう}ゐにけり
など思ひし日しも、見えたり。
(上巻・一八三～一八四頁)
- (3) まして、これよりは、なにせむにかは、あやしともものせむと思ひつつ、暮らし明かして、格子などあぐるに、見出だしたれば、夜、雨の降りける氣色にて、木ども露かかりたり。見るままにおぼゆるやう、
夜のうちはまつにも露^{つゆ}はかかりけり明くれば消ゆるものをこそ思へ
(中巻・二二四～二二五頁)
- (4) 二月も十餘日になりぬ。聞くところに三夜なむ通へると、ちぐさに人はいふ。つれづれとあるほどに、彼岸に入りぬれば、なほあるよりは精進せむとて、上筵、ただの筵の清きに敷きかへさすれば、塵拂ひなどするを見るにも、かやうのことは思ひかけざりしものを、など思へば、いみじうて、
うち拂ふ塵のみ積もるさむしろも嘆く數にはしかじとぞ思ふ
(中巻・二五一～二五二頁)

(1)の場面は、天徳元年(九五七年)に詠んだ兼家宛の道綱母の長歌の一部であるが、ここで「枕の塵」は「使わないために枕につもった塵。兼家の訪れのないことを示す」¹²⁾という夜離れの表現として解されるのが一般的なようである。しかし、この表現を時間の観点から見ると、道綱母が思い悩んだ時間の長さを表しているとも取れるのではないか。また、道綱母の悩みは兼家が自分のもとに訪ねてこないことから生じたものであるだけに、山のように積もった「枕の塵」は、兼家の不在の日數、道綱母の待つ時間をも示していると思われる。

(2)の記事は、些細なことで言い合って出ていった兼家が、五六日経っても訪ねてこない状況を、あの日に使った酒杯の塵を取り上げ表現したものである。ここで道綱母は、塵を

12) 今西祐一郎他校注『土佐日記蜻蛉日記紫式部日記更級日記』(新日本古典文學大系二十四、岩波書店、一九九六年二月)五十八頁。以下、「新大系」と表記する。

水草にたとえ、水草が生えるほど、すなわち泔坏に塵が浮かぶほど兼家の夜離れが續いたと嘆いているのである。したがって、泔坏の塵は兼家の不在の時間、道綱母の待つ時間の経過を象徴していると思われる。

(3)の歌は、兼家を待ちつつ明かした夜のうちに木にかかった露を見て詠んだものである。藤原かつみの「夕暮は松にもかゝる白露のをくる朝や消えは果つらむ」(『後撰和歌集』13)卷九・戀一・五一一)を踏まえて詠んだこの歌は、「別れの朝をひとり寝の朝に變えて、(中略)はてしなくつらい作者固有の人生の姿を詠出している」(全集・二二五頁)という。道綱母はこの歌で「待つ」に「松」をかけ、兼家の来るのを待ちわびつつ過ごした一夜を、その夜の間に木にかかった露を用いて具體化しているのである。

(4)の歌は、近江に夢中になってなかなか顔を見せない兼家を待ちくたびれた道綱母が、彼岸を迎えて精進でもしようと思案を敷きかえさせる時、目に付いた塵を見て詠んだものである。ここで「さむしろに積もった塵」は、兼家の不在の長さを道綱母に喚起させる働きをすると同時に、道綱母の待つ時間の経過を認識させる機能を持っているとも言えよう。

このように積もっている塵、かかっている露に形象化されている「道綱母の待つ時間」は、自分自身の身の上、すなわち兼家との結婚生活の経緯を語ろうとした道綱母の執筆意図から、最初から豫定されていた時間であったと思われる。

(二) 道綱母の過ぎにし時間

「道綱母の過ぎにし時間」とは、言い換えれば「兼家との結婚生活の時間」でもある。天曆八年(九五四年)結婚した時から、自分の結婚生活を振り返ってみる時点までの時間である。道綱母は自分自身の過ぎてしまった時間を、和歌を通して回想しているのである。

- (5) 六月になりぬ。ついたちかけて長雨いたうす。見出だして、ひとりごとに、わが宿の
なげきの下葉色ふかくうつろひにけりながめふるまに (上巻・一四〇頁)
- (6) 十一月に、雪いと深くつもりて、いかなるにかありけむ、わりなく、身心憂く、人つ
らく、悲しくおぼゆる日あり。つくづくとながむるに、思ふやう、
ふる雪につもる年をばよそへつつ消えむ期もなき身をぞ恨むる (中巻・二二〇頁)
- (7) 九月になりて、まだしきに格子を上げて見出だしたれば、内なるにも外なるにも、川
霧立ちわたりて、麓も見えぬ山の見やられたるも、いどもの悲しうて、
流れての床と頼みて來しかどもわがながかかはあせにけらしも
(下巻・三四八～三四九頁)

13) 以下、『後撰和歌集』の引用は、片桐洋一校注『後撰和歌集』(新日本古典文学大系六、岩波書店、一九九〇年四月)による。

(5)の歌は、『古今和歌集』巻二・春歌下・一一三番の小野小町の歌「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」¹⁴⁾を踏まえ、「なげき」に「木」、「長雨」に「眺め」をかけて詠んだ、道綱母のはじめての獨詠歌である。ここで道綱母は自分自身を「下葉」にたとえ、長雨で木の下葉の色が変わったように、自分自身も物思いに沈んでいるうちに容色が衰えてしまったと嘆いている。結婚してわずか二年しか経たない時点で詠んだ歌の割には、おおげさに自分の心情を吐露しているような感じもするが、道綱母はここで下葉の色があせるようになるまでの時間に、容色が衰えてしまうほど心労が多かった自分自身の二年あまりの結婚生活を重ねていると思われる。

(6)の歌を新大系では、「ふり積む雪を老いてゆく自分の年齢のようだと思いながら、雪のように消える時のない(死ぬことのできない)我身をうらめしく思う」(一〇七頁)と解釋している。道綱母がこのような悲痛な獨詠歌に自分の心情を託した原因としては、兼家の新邸である「東三條邸がだんだん竣工し、(中略)時姫母子は確實に新邸の住人になろうが、道綱母子は恐らく迎え入れられないだろうという噂がひろがり、(中略)噂どおりに事が着々と進捗しつつあった」¹⁵⁾からであろうと指摘されている。この歌で、道綱母は「つもる雪」に自分の年齢を重ね、十五年あまりの兼家との結婚生活を振り返っていると思われる。

(7)の歌は、天延元年(九七三年)七月兼家の最後の訪問があった直後に移った、廣幡中川で詠んだ道綱母の獨詠歌である。この歌で道綱母は「中川の水が涸れる」という表現を用い、兼家との夫婦の仲が絶えてしまったことをほのめかしているが、このことについて全集では、「川が流れる意に、時が流れる意をかねる」と解している。したがって、これまで流れてきた中川は、二十年間續いてきた夫婦の仲を象徴しており、『蜻蛉日記』に書かれている道綱母の過ぎてしまった時間すべてを表していると思われる。この和歌について佐藤和喜氏は、「『いと物悲しうて』という現的心情をそのまま歌化するのではなく、これまでの來し方を振り返り、過去から現在までの時間の流れに對する詠嘆と化している」¹⁶⁾と評しているが、従うべき見解であると思われる。

道綱母の「過ぎにし時間」を表している和歌三首は、全て獨詠歌であるが、自分自身の過去のことを回想するというしんみりとした場面の性格上、獨詠歌になるしかなかつと思われる。

14) 以下、『古今和歌集』の引用は、小澤正夫・松田成穂校注・譯『古今和歌集』(新編日本古典文學全集十一、小學館、一九九四年十一月)による。

15) 上村悦子『蜻蛉日記(中)』(講談社、一九九二年八月)七十一頁。

16) 佐藤和喜『蜻蛉日記歌における拾遺集の變貌』(『かげろふ日記・回想と書くこと』、有精堂、一九八七年十月)二〇九～二一〇頁。

(三) 道綱母の不在の時間

道綱母が自分の家を空けたのは、忌違えと物詣での時であったが、本文にそのような道綱母の不在は、家に残っていた侍女たちの「塵はらひ」によって喚起されている。

- (8) 京には、晝さるよしいひたりつる人々、心遣ひし、塵かいはらひ、門も開けたりければ、あれにもあらずながら、降りぬ。(中巻・二八四頁)

引用(8)は、道綱母が『蜻蛉日記』のクライマックスとも言われる「鳴瀧籠り」¹⁷⁾を終えて、二十餘日ぶりに京の家にもどる場面である。ここで、道綱母を迎えるために侍女たちが支度をする時に出てくる「塵かいはらひ」という表現は、掃除をするという表面的意味も持っていようが、家主の短くなかった不在を暗示する表現でもあるように思われる。

以上、『蜻蛉日記』に表れている、時間の経過を表す三つの比喩的表現について検討してみた。その結果、次のようなことが指摘できると思う。

第一に、時間の経過を表す表現の喩義である「塵」(「水草」「露」「雪」「下葉」「川」)は、對應する動詞とセットになって用いられ、その比喩性を帯びているということである。つまり、「積もる」(「ゐる」)「かかる」「うつろふ」「流る」という、時間の属性を表現しているとも取られる動詞と結び付いてはじめて、その比喩性は形成されたと言えよう。また、その時間の属性とは、累積性(「積もる」「ゐる」「かかる」)と流轉性(「うつろふ」「流る」)とに分けることもできよう。

第二に、時間の経過という抽象的本義は、「塵」(「水草」「露」「雪」「下葉」「川」という、具體的な物象にたとえられているということである。抽象化から具象化への轉化は、比喩表現の本來の機能でもあるが、道綱母が固定性という負のイメージを持っているこのような物象を、比喩の素材として取り上げているということは、『蜻蛉日記』の表現論を考える際、示唆に富んでいると思われる。また、道綱母のこのような表現の傾向は、「家の女」¹⁸⁾である彼女の存在基盤から生じたのであろう。

二節においては、『蜻蛉日記』における比喩的表現の形成方法を理解する一つの手段として、時間の経過を表す比喩的表現の素材のうち「塵」に注目し、その従來の比喩的イメージが『蜻蛉日記』にいたってどのような變容を見せているのかについて、考察してみたいと思う。

17) 道綱母の「鳴瀧籠り」を作品全體の「焦點」と指摘したのは、藤岡作太郎である。

—藤岡作太郎『國文學全史平安朝篇』(東京開成館、一九〇五年九月) 三〇六頁。

18) 「家の女」については、益田勝實「源氏物語の荷ひ手」(『日本文學史研究』十一、一九四一年四月)、菊田茂男「家の女—蜻蛉日記」(『國文學』一九七五年十二月號、學燈社)に詳しい。

二 「塵」の比喩

『蜻蛉日記』には巻末歌集を除いて二六一首の和歌が収められている。『蜻蛉日記』の和歌の典拠としては、『萬葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『古今和歌六帖』及びいくつかの私家集の和歌が挙げられており、歌の詠法上、これらの先行する和歌で形成された歌ことばが数多く取り入れられている。歌ことばとは、「和歌の表現の歴史や傳襲が育んできた和歌固有のことばで、その表現史を奥に抱えることで獨特の陰影や美を持ち、和歌を和歌たらしめるように働くことばを指していう。(中略)和歌に固有に用いられる獨特な語構成や比喩性を持つ語までを總稱的に指す」¹⁹⁾という。したがって、『蜻蛉日記』における比喩的表現を検討する際、歌ことばの考察は欠かせないものであると思う。

そこで、「塵」の比喩的意味を考察するにあたって、歌ことばとしての「塵」に注目することにする。まず、『蜻蛉日記』に先行する作品における「塵」の比喩性を検討した後、そのイメージが『蜻蛉日記』にいたってどのように変わってきたかについて考察する。

(一) 先行和歌における「塵」の比喩

『蜻蛉日記』に先行する和歌²⁰⁾における、「塵」という歌ことばは、『萬葉集』に一例、『古今和歌集』に五例、『後撰和歌集』に三例、『大和物語』に三例、『宇津保物語』に七例見られる。

まず、『萬葉集』における「塵」の歌について考えてみる。

① 塵泥の 數にもあらぬ 我故に 思ひわぶらむ 妹がかなしき

(卷十五・三七二七・宅守)²¹⁾

この和歌は、宅守と狭野弟上娘子との贈答歌中の一首である。ここで「塵泥の」は「數にもあらぬ」の枕詞であるが、「自ら卑小な存在と謙遜していう」(新全集)²²⁾表現であるという。したがって、「塵泥」は「つまらなくてみすぼらしい身」のたとえとして用いられていると思われる。

『古今和歌集』における「塵」の歌は、次の五首である。

19) 森朝男「歌ことば」(『國文學』一九九五年七月臨時増刊號、學燈社) 九十六頁。

20) 調査の対象にした先行作品は、『萬葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『宇津保物語』『土佐日記』である。このうち、『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』からは用例が見付からなかった。

21) 以下、『萬葉集』の引用は、佐竹昭廣他著『萬葉集譯文篇』(塙書房、一九八九年三月)による。

22) 小島憲之他校注・譯『萬葉集④』(新編日本古典文學全集九、小學館、一九九六年八月)

- ② 年をへて花の鏡となる水はちりかかるをやくもるといふらむ
(巻一・春歌上・四十四・伊勢)
- ③ 隣より、常夏の花をこひにおこせたりければ、
惜しみてこの歌をよみてつかはしける
塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝るとこ夏の花
(巻四・秋歌上・一六七・凡河内躬恒)
- ④ 知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名のそらに立つらむ
(巻十三・戀歌三・六七六・伊勢)
- ⑤ 風のうへにありかさだめぬ塵の身はゆくへも知らずなりぬべらなり
(巻十八・雑歌下・九八九・讀人しらず)
- ⑥ 今もおほせの くだれるは 塵に繼げとや 塵の身に 積もれる言を 問はるらむ
(巻十九・雑體歌・一〇〇三・壬生忠岑)

②は、「花が『散りかかる』意に、鏡に『塵がかかる』意をかけている」(新全集)歌であるが、ここで「塵」は比喩的表現としては用いられていないようである。③は、「床」に「常夏の花」の「常」をかけて、妹と共寝する床に塵一つ積もらせまいと思っているように、自分にとって常夏の花は、大切な花であると詠んだ歌である。この歌での「塵」は、「寢床に塵がかかるのは夫婦仲の悪くなるたとえ」(新全集)を踏まえた表現として、「夫の夜離れ」の比喩であることがわかる。④は②と同じく伊勢の歌であるが、「塵ならぬ名」とは、「物の數でもない噂」(新全集)の意味であるという。したがって、ここでの「塵」は、「取るに足りないもの」のたとえのようである。⑤の「塵の身」は、新全集に「塵のような身。佛教語の『微塵』を語源とするか」とあるように、佛教語から來たようである。「微塵」とは「眼根所取の最も微細なる色量」²³⁾のことで、この歌での「塵」も「つまらなくてみすばらしい身」のたとえのようである。⑥の歌は、「『古今集』撰定を拜命した喜びと決意とを述懐」(集成)²⁴⁾した、壬生忠岑の長歌の一部である。この歌で「塵に繼げとや」は「残した業績を繼ぐこと」(新全集)であり、「塵の身」とは「塵のような身分の低い私」(新全集)の意味で、「塵」は⑤の歌の「塵」と同じく「つまらなくてみすばらしい身」のたとえとして用いられている。

このように『古今和歌集』の「塵」は、「夫の夜離れ」と「つまらなくてみすばらしい身」「取るに足りないもの」「先例」のたとえとして用いられている。

『後撰和歌集』に「塵」を含んでいる歌は、三首見られる。

- ⑦ 題しらず
夏の夜はあふ名のみして敷妙の塵はらふ間に明けぞしにける

23) 望月信享著・塚本善隆増訂『望月佛教大辭典第五卷』(世界聖典刊行協會、一九五八年二月)四七六九頁。

24) 奥村恆哉校注『古今和歌集』(新潮日本古典集成、新潮社、一九八七年十月)

(巻四・夏・一六九・藤原高)

⑧ 題しらず

吹風の下の塵にもあらなくにさも立ちやすき我が無き名哉

(巻十六・雑二・一一八〇・伊勢)

⑨ 常になき名立ち侍ければ

塵に立我が名清めんもゝしきの人の心を枕とも哉 (巻十八・雑四・一二六六・伊勢)

⑦の「塵」は、新大系の注で「寢所の敷物の塵を拂うことが疎遠になっていた交情が復活する際のシンボリック表現になっている」と解釈しているように、「夜離れ」の比喻として用いられている。⑧と⑨は、④の『古今和歌集』六七六番歌と同じく伊勢の歌²⁵⁾なのである。この三首は「塵」と「名立つ」がセットになって詠まれており、「塵」は『(寢)床』の縁語(新大系・三八三頁)として用いられている。つまり、伊勢の歌で「塵」は「夜離れ」の象徴であることを下敷きにし、その上で「取るに足りないもの」という表面的なイメージを帯びていると思われる。

つまり、『後撰和歌集』に収められている「塵」も、「夜離れ」と「取るに足りないもの」のたとえとして用いられていると言える。

また、『大和物語』一四〇段²⁶⁾には、「塵」の歌が三首見られる。

⑩ しきかへずありしながらに草枕ちりのみぞゐるはらふ人なみ

⑪ 草枕ちりはらひにはからころもたもとゆたかに裁つを待てかし

⑫ からころも裁つを待つまのほどこそはわがしきたへのちりもつもらめ

これらの三首は、元良親王と源昇女との贈答歌である。女のもとに訪ねてきて廂に敷物を敷いて寝て歸った元良が、しばらくの間夜離れした後によこした、「あの廂に敷かれてあった敷物はそのままだのか」という文への女の返事が⑩の歌である。この歌で女は、敷物は敷き變えずにそのままあり、拂ってくれる人がいなくて塵ばかり積もっていると詠んでいる。また、これを受けて⑪の宮の返歌、⑫の女の返歌が続いている。したがって、『大和物語』の歌三首に収められている「塵」は、「男の夜離れ」の象徴として用いられているのである。しかし、⑪と⑫の歌に見える「待つ」という表現、特に⑫の、「唐衣の完成を待っている間に私の床の塵はもっと積もるだろう」という歌からは、「積もる塵」＝「待つ時

25) この他にも「塵」に関する伊勢の歌としては、「なこりなく見かゝれにける白玉ははらふ袖にもちりたにもみず」(『伊勢集』・三一九・正保版「歌仙歌集」)がある。

一和歌史研究会編『私家集大成第一巻中古 I』(明治書院、一九七三年十一月)二五七頁。

26) 高橋正治他校注・譯『竹取物語伊勢物語大和物語平中物語』(新編日本古典文學全集十二、小學館、一九九四年十二月)

間』という圖式が読み取れるのではないか。

このように、『大和物語』の「塵」という表現は、「夜離れ」を象徴すると共に、女の「待つ時間」のたとえとしても用いられていると思われる。

最後に、『宇津保物語』²⁷⁾の「塵」を含んでいる歌について考察してみる。

- ⑬ 恨むれど歎かずにもぬ塵や 深き愛宕のみねと成るらん
(「藤原の君」・一・二〇九頁)
- ⑭ たびごとに空にたちぬる塵なれや 露ばかりにも浮ぶなるかな
(「藤原の君」・一・二二〇頁)
- ⑮ 君がためちりとてたつる魂や つもれば戀の山となるらん (「菊の宴」・二・七十頁)
- ⑯ 我くたく心のちりは雲となり 落つる涙は海となるかな (「菊の宴」・二・七十三頁)
- ⑰ かぜ雲のおどろく龜の甲の上に いかなるちりか山とつもりし
(「菊の宴」・二・七十三頁)
- ⑱ 水を淺みひく人もなきあし曳の 山の小川は塵ぞしらぶる (「初秋」・二・一九七頁)
- ⑲ ちりつもる山もなにせん雲かゝる ことのほかなる宿をうれしみ
(「樓上下」・三・五二一頁)

⑬の歌は、その上句が『蜻蛉日記』(4)の歌を連想させる。この歌は「幾かへりかずおく露の時のまにつもれる山と見え頼まむ」(「藤原の君」・一・一九七頁)という、あて宮の返歌に更に返した實忠の歌である。大系の注に「私の恨みなげく數には到底及ばない塵でも、直ちに高い愛宕の峰となりますように、『なげきの數』が『時の間につもれる山』となるでしょう。だから私を信頼して結婚して下さい」とあるように、この歌での「塵」は物の數でもない、「取るに足りないもの」のたとえとして用いられている。

⑭の歌も、あて宮と實忠の贈答歌のうち、あて宮の返歌であるが、『古今和歌集』六七六番歌「知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名のそらに立つらむ」(伊勢)を本歌としていると大系に指摘されている。この歌での「塵」も、⑬と同じく軽くて物の數でもない、「取るに足りないもの」のたとえのようである。

⑮の歌は、あて宮の懸想人の一人である兵部卿宮の歌であるが、ここでの「塵」も大事な「魂」に對稱するもの、すなわち「取るに足りないもの」のたとえとして用いられている。

⑯は、あて宮宛の春宮の歌であるが、ここでの「塵」は、右の三首とは異なるイメージを持っている。つまり、「あなたのため故に、悩んで粉々になった私の心の塵は集まって雲となり、落ちる涙は海となるほです」(大系)とあるように、「(心の)塵」は「心の汚れ、煩惱」の意を表している。

27) 以下、『宇津保物語』の引用は、河野多麻校注『宇津保物語一・二・三』(日本古典文學大系十・十一・十二、岩波書店、一九八八年七月・六月)による。ただし、一部表記を改めた。

⑰は、⑯の春宮の歌へのあて宮の返歌である。この歌の下句に出てくる「塵が山と積もる」という表現は、⑬の「塵がみねと成る」、⑮の「塵が戀の山となる」と相通じるものであることから、二首と同じく「取るに足りないもの」のたとえに思われる。

⑱の歌は、その前の「手ふれらるゝ人もなければ、みな塵居にたりや」という文からも分かるように、「琴に積もった塵」を詠んだのである。したがって、この歌での「塵」は、夜離れとは別の意味での「人の途絶え」のたとえであると思われる。

⑲の「塵」は、『ちりつもる』は山の序詞(大系)とあるように、⑬⑭⑮⑰と同じく「取るに足りないもの」のたとえのようである。

このように、『宇津保物語』の「塵」は、「取るに足りないもの」「煩惱」「人の途絶え」のたとえとして用いられており、あて宮と懸想人たちの歌のやりとりの場面に多く用いられていることが分かる。

以上、『蜻蛉日記』に先行する作品における、「塵」という歌ことばの比喩性について考察してみた。その結果、考察の範囲から分析された「塵」の比喩は、「取るに足りないもの」(八例)、「夜離れ」(五例)、「つまらなくてみすばらしい身」(三例)、「人の途絶え」(一例)、「先例」(一例)、「煩惱」(一例)の順に用いられていたことが分かった。

次は、主に「取るに足りないもの」「夜離れ」「つまらなくてみすばらしい身」のたとえとして用いられてきた「塵」という歌ことばの、『蜻蛉日記』にいたっての意味の變容について考察する。

(二) 『蜻蛉日記』の「塵」の比喩

『蜻蛉日記』に「塵」の用例は八例見られるが、そのうち歌ことばとして用いられているのは三例である。

- (a) 思ふまに 山と積もれる しきたへの 枕の塵も 獨り寝の 數にし取らば つきぬべし
(上巻・一五二頁)
- (b) ゆきかへる かりの別れに あらばこそ 君が夜床も あれざらめ 塵のみ置くは むなし
くて 枕のゆくへも 知らじかし
(中巻・二一三～二一四頁)
- (c) うち拂ふ塵のみ積もるさむしろも 嘆く數にはしかじとぞ思ふ
(中巻・二五二頁)

これらの三首の「塵」について、諸注釋書では次のように解釋している。

(a)について、全講²⁸⁾では「使用しない方の枕に積る塵」(六十頁)、全注釋²⁹⁾では「兼家の通いがないので使わない寢所の枕に塵が積ったという」(一〇四頁)、集成³⁰⁾では「兼家の夜

28) 喜多義勇『全講蜻蛉日記』(至文堂、一九六一年十二月)

29) 柿本獎『蜻蛉日記全注釋上巻』(角川書店、一九六六年八月)

離れが續き、寢所も用いないゆえ、枕の塵も積るにまかせてある」(三十七頁)、新大系では「使わないために枕につもった塵。兼家の訪れないことを示す」(五十八頁)となっている。

(b)は大宰権帥に貶せられた高明の北の方に贈った長歌の一部である。この歌について、大系³¹⁾では「かりそめならぬ別れゆえ夜床も荒れて塵のみ置くことであろう」(一八〇頁)、新大系では「『床荒る』は共寝が絶えて、寢床が放置されるさま」(一〇二頁)と言っている。

(c)については、大系で「殿との仲が絶え夜床の筵に塵がつもった、夫婦の仲では床の筵は敷きかえないものというが、塵を拂い筵を敷きかえるのは切ない、いっそ床の筵を敷くまいと思うの意」(二一二頁)、全講で「多く積った塵の数よりもなほ私の歎きの数の方が多いと思う。『しかじ』は如かじと敷かじをかけて『さむしろ』の縁語とした」(二四二頁)、全注釋で「嘆きを重ねた度数の多かったことをいわんがために、無数とされる塵を引き合いに出し、その数も及ぶまいと言った獨自述懐の歌」(三九九頁)、全集で「途絶えの間に積もった寢床の塵を拂い、夫を迎える意」(一五〇頁)、集成で「拂うほど塵が積ったのは、夫の夜離れが續いたからである」(一三五頁)と解釋している。

これらの注釋を通して、これらの歌に収められている「塵」は、一般的に「夫の夜離れ」の象徴と解釋されていることが分かる。この三首は、『蜻蛉日記』に先行する和歌で形成されてきた「塵」の従來のイメージを背景にして詠まれた歌だけに、そのような解釋を否定することはできない。しかし、時間の觀點から「塵が積もる」場面を見ると、床とか枕に塵が積もる間、夫の訪問を待ち續けている女の「待つ時間」が重なっているように思われる。

『蜻蛉日記』における「塵」が従來のイメージの一つである「夜離れ」の象徴だけではなく、「道綱母の待つ時間」の経過をも表しているという根據は、作品の内部と外部から考えられると思われる。

まず、作品内部の根據としては、先述した(2)と(8)の場面が挙げられると思われる。(2)の場面で注目すべきは、塵が枕や床(筵)に積もっているのではなく、泔坏という兼家の身のまわりの物に浮かんでいるということと、「水草」になぞらえられた塵の持っている象徴性である。

『蜻蛉日記』に先行する作品における「夜離れ」の象徴として用いられている「塵」は、「床」「敷妙」「枕」とセットで用いられるのが特徴であった。それが『蜻蛉日記』にいたって「泔坏の塵」に擴大されているのである。道綱母は兼家が出ていった日に使った泔坏に浮いている塵を見て兼家のことを思い、兼家の夜離れ、すなわち兼家の不在の時間と、自分自身の待つ時間をあらためて思い知らなければならなかったのである。

また、『蜻蛉日記』に先行する和歌³²⁾における「水草」の歌は『萬葉集』に三首、『古今和歌

30) 犬養廉注『蜻蛉日記』(新潮日本古典集成、新潮社、一九八二年十月)

31) 川口久雄他校注『土佐・かげろふ・和泉式部・更級日記』(日本古典文學大系二十、岩波書店、一九八五年十月)

32) 調査の範圍は、注20)と同じである。

集』に一首見られる。

- (d) 山部宿祢赤人、故太政大臣藤原家の山池を詠む歌一首
古の 古き堤は 年深み 池の渚に 水草生ひにけり (『萬葉集』・卷三・三七八)
- (e) 霜に寄する
春されば 水草の上に 置く霜の 消つつも我は 戀ひ渡るかも
(『萬葉集』・卷十・一九〇八)
- (f) 秋付けば 水草の花の あえぬがに 思へど知らじ 直に逢はざれば
(『萬葉集』・卷十・二二七二)
- (g) わが門の板井の清水里遠み人し汲まねば水草生ひにけり
(『古今和歌集』・卷二十・神遊びの歌・一〇七九)

これらの歌のうち、(d)の『萬葉集』三七八番歌と(g)の『古今和歌集』一〇七九番歌は、「水草」の比喩的意味を考える際、注目すべき歌であると思う。二首は共に「水草が生えた」理由を上句で明かしているが、(d)では「年が経た」ので、(g)では「人里が遠くて汲みに来る人がいなくて」であるという。したがって、「水草」は「時間の経過」と「人の途絶え、または夜離れ」という象徴性を持っていたことが分かる。そして、このような「水草」のイメージが『蜻蛉日記』にいたって、兼家の不在の時間、「道綱母の待つ時間」を表す表現として用いられたと思われる。

引用(8)の地の文に見える「塵」は、先述したように「道綱母を迎えるために掃除をした」という表面的な意味とも取られるが、家主の不在の時間、すなわち「道綱母の不在の時間」を表す表現とも取ることができよう。

次に、『蜻蛉日記』における「塵」が「道綱母の待つ時間」を表しているという作品外部の根拠としては、先述した⑫の歌が挙げられると思われる。「唐衣の完成を待つ間に積もる塵」は、「積もる塵」＝「待つ時間」の等式に言い替えることができよう。

以上、先行和歌における「塵」の比喩と、『蜻蛉日記』の「塵」の比喩について考察してみた。「塵」の従来比喩的意味は、『蜻蛉日記』にいたって、「水草」の歌と地の文における「塵を拂う」場面から分かるように、「夜離れ」の意味と共に「道綱母の待つ時間」をも表す比喩的表現になったと思われる。

おわりに

以上の考察をまとめてみると、次のようになる。

第一に、『蜻蛉日記』における時間の経過を表す比喩的表現は、「道綱母の待つ時間」「道

綱母の過ぎにし時間」「道綱母の不在の時間」に分けて考察することができる。そして、その時間の属性とは、累積性と流轉性にまとめられる。

第二に、『蜻蛉日記』における「塵」という表現が「夜離れ」という従来イメージを受け継いだ形として用いられているのは事実であろう。しかし、「塵」が「水草」にたとえられ、また一カ月弱の道綱母の山籠り中の不在を表す素材として用いられることによって、「塵」は時間の経過を表す表現に變容しているとも言えよう。

第三に、「塵が積もる」という表現が時間の経過を表す比喩的表現になったということは、『蜻蛉日記』という作品における、時間表現の重要性を逆に物語っているように思われる。

第四に、『蜻蛉日記』はこのように、従来イメージを受け継ぎながらも、自分なりの表現の獨自性を構築していると言えよう。

【参考文献】

- ・ 秋山虔(1970)「外的時間と内的時間」『國文學』學燈社.
- ・ 石原昭平(1991)「日記文學における時間—回想・他者・語り—」
『女流日記文學とは何か』勉誠社. 127頁
- ・ 犬養廉(1982)『蜻蛉日記』新潮社.
- ・ 今西祐一郎他校注(1996)『土佐日記蜻蛉日記紫式部日記更級日記』岩波書店. 58頁
- ・ 柿本獎(1966)『蜻蛉日記全注釋上卷』角川書店.
- ・ 片野達郎他編著(1997)『歌ことばの辭典』新潮社. 96頁
- ・ 上村悦子(1992)『蜻蛉日記(中)』講談社. 71頁
- ・ 川口久雄他校注(1985)『土佐・かげろふ・和泉式部・更級日記』岩波書店.
- ・ 河添房江(1992)『源氏物語の喩と王權』有精堂. 7頁
- ・ 喜多義勇(1961)『全講蜻蛉日記』至文堂.
- ・ 近藤一一(1981)「蜻蛉日記の日付表現」『一冊の講座蜻蛉日記』有精堂. 219頁
- ・ 佐藤和喜(1987)「蜻蛉日記歌における拾遺集的變貌」『かげろふ日記・回想と書くこと』有精堂.
209～210頁
- ・ 橋本仲美(1969)「比喩の表現論的性格と『文體論』への應用(1)(2)」『國文學』學燈社.
- ・ 藤岡作太郎(1910)『國文學全史平安朝篇』開成館. 306頁
- ・ 村井康彦(1978)「待つ女」『國文學』學燈社.
- ・ 森朝男(1995)「歌ことば」『國文學』學燈社. 96頁
- ・ 柳瀬あや子(1995)「『蜻蛉日記』についての一考察—上卷に於ける時間経過のとらえ方—」『神戸文化短期大學研究紀要』第十九號. 3頁

要 旨

本稿は『蜻蛉日記』の作者道綱母が「自らが身を以て生きた時間」をどのように作品に形象化しているのかを、作品に用いられた時間の経過を表す比喩的表現のうち、特に「塵」という表現に注目し考察してみたものである。

考察の結果、まず『蜻蛉日記』における時間の経過を表す比喩的表現は、語り手(表現主體)である道綱母を中心に置いて分析してみたとき、道綱母の待つ時間(兼家の不在の時間)、道綱母の過ぎにし時間(兼家との結婚生活の時間)、道綱母の不在の時間という三つに分けることができる。なお、『蜻蛉日記』に先行する和歌において「塵」という歌ことばは、『萬葉集』に一例、『古今和歌集』に五例、『後撰和歌集』に三例、『大和物語』に三例、『宇津保物語』に七例見られるが、これらの「塵」の比喩は、「取るに足りないもの」(八例)、「夜離れ」(五例)、「つまらなくてみすばらしい身」(三例)、「人の途絶え」(一例)、「先例」(一例)、「煩惱」(一例)の順に用いられていたことが分かった。さらに、『蜻蛉日記』に「塵」の用例は八例見られるが、そのうち歌ことばとして用いられているのは三例である。これらの歌に収められている「塵」は、従来「夫不在の妻の寢室の枕や床に積もる『塵』は、逢瀬の途絶えた日数の象徴で、王朝的閨怨の代表的な素材」として歌に用いられてきたのである。しかし、時間の観点から「塵が積もる」場面を見ると、一方で「待つ女」である道綱母が「塵が積もる」ほど兼家を「待つ時間」、言い換えれば兼家の不在の時間を表す比喩的表現として取ることもできると思われる。

つまるところ、「塵が積もる」という表現が時間の経過を表す比喩的表現になったということは、『蜻蛉日記』という作品における、時間表現の重要性を物語っているのであり、『蜻蛉日記』はこのように、従来イメージを受け継ぎながらも、自分なりの表現の独自性を構築していると言えよう。

キーワード：蜻蛉日記、道綱母、時間、比喩的表現、塵、水草、夜離れ

투 고 : 2005. 2. 28

1차 심사 : 2005. 3. 12

2차 심사 : 2005. 4. 2

住 所 : (138-041) 서울시 송파구 풍납1동 510 신성APT 102-903호

電 話 : 016-231-7716

e-mail : mslee82@hanmail.net